

氏名	根本 知
学位	博士（書道学）
学位記番号	博甲第100号
学位授与年月日	2013年3月22日
審査研究科	文学研究科
論文題目	『光悦筆和歌巻に見る平安朝スタイルの継承と創造』
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授 安達 直哉 (副査) 大東文化大学教授 河内 利治 (副査) 大東文化大学教授 澤田 雅弘 (副査) 大東文化大学非常勤講師 古谷 稔

根本 知 博士論文 審査報告

根本 知氏は、昭和 59 年（1984）11 月 25 日の生まれで、現在 28 歳である。平成 15 年（2003）4 月大東文化大学文学部書道学科に入学し、同 19 年（2007）3 月同学科を卒業した。すぐに同年 4 月大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士課程前期課程に入学し、同 21 年（2009）3 月同課程を修了し、修士（書道学）の学位を取得した。引き続き同年 4 月同大学院文学研究科書道学専攻博士課程後期課程に入学し、現在に至っている。職歴としては、平成 23 年 9 月から同 24 年 3 月まで埼玉県立越生高校非常勤講師（書道）、同 24 年 4 月からは私立関東国際高校非常勤講師（書道）を務め現在に至っている。さらに平成 21 年 4 月から同 23 年 3 月まで大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻教育補助員を務めている。

根本氏の専攻は日本書学で、主な研究成果に次の 3 篇の論考がある。

①「光悦様の源流」

『書道学論集』5号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、平成 20 年 3 月

②「光悦書状にみる光悦と大文字屋一松斎宗積筆『先祖記』（東北大学附属図書館蔵）を中心に」

『書道学論集』7号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、平成 22 年 3 月

③「光悦筆和歌巻に見る書の独自性」

『汲古』61号、汲古書院、平成 24 年 6 月、査読あり

このほかに、平成 22 年 7 月に書学書道史学会大会で「本阿弥光悦筆和歌巻にみる書の特質」を研究発表している。以上の成果を深め、未発表の論考も加えて、「光悦筆和歌巻に見る平安朝スタイルの再生と発展」の題目のもとに研究成果をまとめ、博士学位論文として提出するに至った。

以下、審査結果を報告する。

1、論文の要旨および特色

本論文の構成を目次によって概観すると、以下の通りである。

序章

第一章 光悦の生涯

第一節 光悦と時代

第二節 『本阿弥行状記』および『にぎはひ草』の成立と内容

第三節 芸術村、鷹ヶ峰について

第二章 交友関係の実態

第一節 大文字屋との交友

第二節 古田織部との交友

第三節 烏丸光広との交友

第四節 加賀藩主および重臣との交友

第五節 角倉素庵との交友

第三章 光悦流の淵源に関する一考察

第一節 先行研究の整理

第二節 素眼流と光悦流

第四章 光悦筆和歌巻における筆法の考察

第一節 和歌巻考察における研究方法について

第二節 和歌巻における筆法の考察

第五章 漢字作品および書状との比較

第一節 筆線の変化 — 漢字作品との比較 —

第二節 先行研究における光悦書状の書風変遷

第三節 宛所・内容による書風の違いの有無

第四節 書状との比較 — 研究方法 —

第五節 書状における筆法の考察

第六章 和歌の選定における一基準

第一節 研究目的

第二節 「べたづけの忌避」について

第三節 「葦手歌絵」について

第四節 「歌絵」と「書」の関係

第五節 光悦の工芸に見える「歌絵」の表現

第六節 和歌の選定における一基準

第七章 光悦の書のスタイルにおける古筆との類似性

第一節 先行研究の整理と問題点の所在

第二節 光悦の書における基本スタイル

第三節 日本書道史における下絵と散らし書き遺品について

- 第四節 「堺色紙」との類似性
- 第八章 下絵を考慮した光悦の書の独自性
 - 第一節 光悦筆和歌巻の課題
 - 第二節 宗達研究の整理― 肉筆下絵和歌巻の変遷 ―
 - 第三節 「四季草花下絵古今集和歌巻」と書
 - 第四節 「鹿下絵新古今集和歌巻」と書
 - 第五節 「蓮下絵百人一首和歌巻」と書
 - 第六節 「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の新たな価値付け

終章

主要参考文献一覧

以上が目次の概略である。以下、上記の章立てに沿って内容を略述する。

本論文は全八章から構成され、その前後に序章と終章を配置する。

序章

まず光悦の書における研究史を概観したのち、従来の論考について問題点を含めて整理した。主立った先学の評価では、光悦は「上代様」や「平安朝古筆」を学び、書の作品に生かしたのではないかとの見解が多々見られ、さらにその書は「平安朝藝術の復興」と評価されることもあったが、今まで光悦の書と具体的な古筆との比較・考察はなされてこなかった。したがって、その検証は、光悦の書の特徴を浮き彫りにするためにも重要な課題と言えよう。

そこで本論文は、光悦が実際に筆を取った遺品の中に、平安古筆がどのように生かされてきたかについて、具体的な古筆との比較を試みると共に、その平安朝スタイルとの差異から浮き彫りになる、古筆の書を更に発展させた光悦の書の独自性について明らかにすることを目的とする。

第一章 光悦の生涯

第二章 交友関係の実態

光悦の生涯を整理し、交友関係の実態を明らかにすることで、取り巻く環境に古筆との深い関わりがあることを確認した。

光悦の交友は多岐にわたり、中でも町衆との繋がり茶の湯を通じた交友が主である。交友関係を知るには、現在三百通以上が確認されている光悦書状が一次史料となる。しかし、現在確認される書状のうち、宛名や本文に登場する人物名が不明なものや、あいまいなものは未だ多く残されている。そこで、松斎宗積筆『先祖記』に注目し、今まで不明とされていた書状本文に登場する人物をいくつか明らかにした。たとえば、名物を多く所持した呉服商である大文字屋との交友の深さを示すことができた。加えて、光悦は加賀藩の藩主と重臣、古田織部、烏丸光広とも交友関係を築いていった。中でも、前田利長との交友は、本学所蔵の本阿弥光悦筆書状（五月廿七日付）からもその実態がかなり深いものであったことが分かり、光悦は一町衆の身でありながら、当時、社会において影響力のあつ

た人物たちと、茶の湯や書を通して深い交友関係を築いていった様子が確認できた。

そして、角倉素庵とは嵯峨本の刊行において協力関係にあった。これは、光悦が時代の表舞台に出るにあたって、心の中心に古典文化復興の精神があったこと、またそれが彼の芸術意識の母胎となったことを示している。嵯峨本の刊行は、「平安朝の美の再生」とでもいえる第一の大きな事業であった。

第三章 光悦流の淵源に関する一考察

以上の視点を基に、第三章以降、光悦の書に焦点を当て、その書の独自性についての考察を試みた。光悦流の追随者は公卿や町衆、連歌師など広範囲にわたった。その魅力を生み出した淵源は、残念ながら文献上からは直接には窺い知れない。しかし、本章において、今まで注目されてこなかった『筆蹟流儀景図』および『筆道流儀分』に目を向けると、光悦流がいずれも素眼流の後に名を連ねている事実が明らかとなる。素眼筆とされる「菟玖波集」との書風比較を行ったことによって、光悦の用いた字形は室町期の流れを汲むものであると指摘できた。

第四章 光悦筆和歌巻における筆法の考察

光悦の書の筆法について考察した。光悦の仮名は多くの平安古筆と同じく、真ん中をふくよかに書く「柳葉形」の線を用いている。また、連綿法についても古筆との共通性が看取できること、さらに「継色紙」などにも見られる書式「三角法構成の散らし書き」の採用を含め、光悦の書における基本スタイルの基盤に、平安朝の様式がしっかりと組み込まれていることが確認できた。

第五章 漢字作品および書状との比較

漢字作品および書状との比較を行った。これにより、和歌巻において光悦が明確な揮毫意識を持って制作に臨んださまが浮き彫りとなった。光悦書状では主として「叩くような筆法」を用いている。これは「柳葉形」の筆線に、上下律動の運筆、それらが相まって生じる筆力がもたらす、和歌巻とは異なる線質である。特にこれは中期以降に多く見られ、リズムカルな運筆から起こるものと考えられる。

加えて、晩年期の書状には、始筆の当たりが強く、そこから終筆に向けて徐々に力を抜くという漢字作品の縦画と同様の筆線が見られる。光悦書状は中期以降、連綿が非常に少なくなり、書体が簡素になる。それは「叩くような筆法」による横への運筆幅が狭くなったことが要因と考えられ、文字の点画の隙間も広く取ることで書状全体に余白が多く生じている。また、「之」の字形を省略せず揮毫することも晩年期特有のものであり、縦画の特徴も踏まえて、これらは書状の位置付けにおける判断の重要な一基準と成り得ると思われる。

このように、和歌巻の筆法との明らかな差異が看取できることは、光悦の書の幅の広さを示唆するものであり、言い換えれば、和歌巻制作時にはしっかりと意識を持って、古筆と比肩し得る「柳葉形」の線質や、光悦様の代名詞でもある「肥瘦の変化」などを用いたことへの証明となったといえる。

第六章 和歌の選定における一基準

本章では、和歌巻の下絵として描かれたモチーフが和歌の中に詠み込まれている場合には、その和歌を敢えて選定しないという、光悦独自の和歌選定における特徴が何に起因するのかについて考察した。平安期より伝わる「歌絵」という表現に密接に関わっていることに着目し、その手法および光悦筆和歌巻との共通性や差異から、光悦の和歌の選定における一基準を示した。和歌巻において、一般に知られる三十六歌仙や『新古今和歌集』などから、下絵のモチーフが含まれる和歌を省くことによって、その和歌を想起させるという手法は、従来の「歌絵」遺品をさらに発展させたものとして評価および注目に値する。そこには書を認めるにあたり、下絵を考慮し、故実を踏まえたうえで和歌を選定する光悦の高い揮毫意識が感じられ、従来の「歌絵」に見る歌語と絵の関係を基礎として、その手法を和歌巻における下絵と和歌の関係である「べたづけの忌避」に発展させたところに注目すべき特徴があろう。

第七章 光悦の書のスタイルにおける古筆との類似性

これらの成果を受けて、本章では光悦の書における基本スタイルの位置付けを目指した。光悦の書の特徴である「肥瘦の変化」および「放ち書き」の採用、そして「三角法構成の散らし書き」は、それらが相まって「横展開の書」と呼べる特徴となる。この特徴は平安期の「堺色紙」にまで遡ることが可能であり、これは、光悦によって突如として生み出された芸術性として捉えるのではなく、長い歴史の上で生まれ、引き継がれてきた要素を光悦が汲み取ったものと解釈すべきものである。

このように、光悦筆和歌巻の書には、平安朝スタイルとの共通性が多く見られた。そして、この特徴は巻物形式においてその趣向が遺憾なく発揮され、光悦の書が、様式において魅力を有することを示す。

第八章 下絵を考慮した光悦の書の独自性

また、光悦が書の基本スタイルを発展させ、その独自性を示したものに俵屋宗達が下絵を施した肉筆下絵和歌巻が挙げられる。本章では、下絵と書の関係性に焦点を当て、光悦の書の基本スタイルとの比較から、肉筆下絵を考慮した光悦の書の独自性についての考察を試みた。特に「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」では、宗達下絵に歩み寄り過ぎることなく、自身の書のスタイルを構成する墨継の特徴を、鶴の飛翔に呼応させるという新たな調和の試みに挑戦した様子が看取できることから、光悦と宗達が最も生き生きと競演した和歌巻であったと位置付けることができよう。他の和歌巻も含め、肉筆下絵に対し、墨継の工夫や、書と絵の同化、絵とフレーズの同調など、様々な調和の試みがなされたことは注目に値する。

終章

以上のように、光悦筆和歌巻の特徴は、過去の下絵と散らし書き遺品には見られない特有用なものであり、下絵を考慮した調和の試みの実践例は、古筆の書をさらに発展させた光悦の書の独自性として新たに価値付けることができた。その中でも、「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」は、「四季草花下絵古今集和歌巻」で成功した調和の試みに満足することなく、さらに書の可能性を広げようと積極的に挑戦したものであり、光悦と宗達のコラボレーション

作品における代表的所産として位置付けることができるのである。

2、論文の審査内容および評価

第一章と第二章においては、光悦の生涯と交友関係を述べており、第三章以降の論の前提となるべき章である。今までの研究を適切にまとめているのみでなく、新たに『先祖記』写本を調査して活用するとか、新発見の書状を組み込むなどの点は評価される。それにより光悦の新たな交友関係を見出し、平安古筆を光悦が目にする機会が多かったことを推定する根拠とすることができたのである。

第三章では、光悦の書の淵源を探った試みであるが、さまざまな史料を使いながら、素眼の書にたどりつく。そして素眼の書とされる「菟玖波集」と文字の比較をし、その類似性を指摘し、光悦の書が室町期の素眼流の書を継承していることを跡付けたことは新たな成果である。

第四章では、今まで光悦の筆法について、平安朝スタイルとの比較という視点を持って、詳細に検証したものは見受けられない点を問題視した。光悦筆和歌巻と平安古筆における筆法を具体的に比較し、光悦の書における基本スタイルの基盤に、平安朝の様式がしっかりと組み込まれていることを確認した。

第五章においては、漢字作品や書状などを和歌巻と比較したが、和歌巻の筆法との明らかな差異が看取できるとして、光悦の書の幅の広さを示唆するものであるとする。具体的に比較したことは新たな試みであるが、いまだ十分な結論を得たとはいえず、今後詰める必要があるだろう。

第六章では、和歌巻において、下絵として描かれたモチーフが和歌の中に詠み込まれている場合にはその和歌を敢えて選定しないという、光悦独自の特徴はすでに指摘されている。しかし、それが何に起因するのかについて根本氏は新たな見解を示した。すなわち、平安期より伝わる「歌絵」という表現に密接に関わっていることに着目したのである。

第七章においては、光悦の書における基本スタイルを「肥瘦の変化」、「放ち書き」、および「三角法構成の散らし書き」とした。そしてその特徴の淵源を平安期の「堺色紙」にまで遡らせ、具体的に比較検討して類似性を実証した。

第八章では、宗達が下絵を施した肉筆下絵和歌巻を挙げ、そこに光悦が墨継の工夫、書と絵の同化、絵とフレーズの同調など、様々な調和の試みをしてその独自性を示したとする。特に「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」において、自身の書のスタイルを構成する墨継の特徴を、鶴の飛翔に呼応させるという新たな調和の試みに挑戦したとし、光悦と宗達が最も生き生きと競演した和歌巻であったと位置付けた。

このように本論文は、各章の目的と結論は明確であり、全体として各章の関連性も十分に考慮されている。

先学の評価では、光悦は「上代様」や「平安朝古筆」を学んで書の作品に生かしたのではないかと推定されてはいたが、本論文では、光悦の書と具体的な古筆との比較・考察を試み、古筆の書を更に発展させた光悦の書の独自性について明らかにすることを最大の目

的とした。

この目的は一定程度果たされており、平安古筆の堺色紙を例に具体的に細かく類似性などを実証できた。また光悦の書の字形等が室町時代以来の書、特に素眼流の書を引き継いだ部分があるとしたことは今まであまり言われることがなかった。そして平安古筆と室町期の書をベースに光悦は、宗達下絵のある肉筆下絵和歌巻において、下絵を考慮した調和の試みをなし、古筆の書をさらに発展させたという。これこそが光悦の書の独自性として新たに価値付けた点は評価されよう。

しかしながら、修正すべき点がいくつか残されている。

まず形式上の問題として、書状などを引用する時に刊本からそのまま書き下し文や大意を引いており、再吟味する必要があった、また引用の仕方に統一性がみられない、釈文のみあげればよいのではないかとの指摘があった。

すでに先学が使われている独特の用語をそのまま無媒介に用いている点については、自分なりに咀嚼してから使うべきであり、自らが使用している用語についてはきちんと定義してから用いるべきとの指摘もあった。

全般的には文章がやや冗長であり、もっとコンパクトにすべきである、説明で不要か縮小すべき部分が多いとの意見が出された。

また各章で使用された史料の信憑性について疑問が出されたので、注等で詳しい説明を行うことになった。

さらに文章表現が的確でないために先行研究との違いがわかりづらいとの指摘があり、自説の明確化が望まれた。

最後にタイトルが内容を十分に表しているかとの疑問が出され、再検討する必要があるとの意見の一致をみた。

以上の修正を施せば、本論文は先行研究で明らかにされた論点について、ある場合は具体的に検証し、またある場合には一歩進めた結論を導くものであると評価された。

3、結論

審査委員会は、2月15日に本論文に関する口述試験を行った。そこでは、各委員が本論文の細部に至るまで質疑したのに対し、氏は的確に回答することができた。そのため最終的に審査委員会は全委員一致で、口述試験が合格であると判断した。以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士学位審査委員会は、根本知氏が博士（書道学）の学位を授与されるに適格であるものと判断し、ここに報告する。